

第11章 知識の全体論と決定実験
野家啓一 (2015) 「科学哲学への招待」 筑摩書房
p.173-187

担当者：K

1. 経験主義の二つのドグマ p.173-177

クワインの科学哲学
「ネオ・プラグマティズム」と
呼ばれる新たな視角から論理実
証主義批判を試みる。

- 「経験主義の二つのドグマ (Two Dogmas of Empiricism)」

W・V・O・クワイン, 飯田隆訳 (1992) 「論理的観点から」 勁草書房
ここでの「経験主義」とは、論理実証主義 (= 論理経験主義) のことに他ならない。

論理実証主義は以下の区別を前提としている。

p.175

① 「分析的真理/総合的真理という二分法」

- ↑ ・分析的真理：経験を参照することなしに正しさを立証しうるような真理。
- ↓ ・総合的真理：観察や実験など経験を通してはじめて正しさを立証しうるような真理。

➤ クワインの主張：「連続主義(gradualism)」 P175,177

分析的真理と総合的真理の間にあるのは「種類 (kind) の差」ではなく「程度 (degree) の差」。つまり、両者は連続的であり、境界線を引くことで二分化できない。

クワインの論証：分析的真理を明確に定義することはできない。分析的真理を規定しようとする試みは、結局のところ循環論法に陥らざるをえない。分析的真理の概念を明確に規定できないならば、ある命題が分析的であるか否かを判断することはできず、それを総合的真理から区別する基準も見出せない。

→ 「知識全体論」：分析的真理と総合的真理との質的な差異を否定し、知識体系を諸命題が相互に繋がりあった全体的ネットワークと見なす。

2. 決定実験の不可能性—デュエム＝クワイン・テーゼ p.177-183

- ② 「還元主義 (reductionism)」: 「有意味な命題はすべて直接的な経験を表す命題に還元することができる」という主張。

経験的な検証や反証の手続きの対象は、テスト命題と呼ばれる単独の命題であったので、検証されたり反証されたりする知識の基本単位は「命題」である。つまり、「個々の命題がそれぞれ単独で経験的なテストにさらされる」。

- P・デュエム: 「決定実験(crucial experiment)」の不可能性を示唆。P181,14
→ 物理学の範囲に限定し、全体論を主張。P183,1

- クワインの主張:

・全体論「デュエム＝クワイン・テーゼ」

知識は個々の命題として独立に存在するのではなく、相互に結びついて一つの体系を構成している。知識に対する検証や反証という手続きも、この体系全体を対象としてなされねばならない。

- 単位として、「知識の全体的なネットワーク」を提示 (知識全体論)。

- 周縁-中心構造

知識体系は全体として経験に接しているものの、経験に直接的に接する周縁部分と経験の影響を直接的に受けない中心部分という「周縁-中心構造」をもっている。

・周縁-中心構造をもつわれわれの知識体系の一部をなすある命題が経験的なテストによって否定されたという場面において…

- クワインの主張:

「体系のどこか別のところで思い切った調整を行うならば、どのような言明に関しても、何が起ころうとも真とみなし続けることができる」

「どのような言明も改訂に対して免疫があるわけではない」

- いかなることが起ころうとも保持されるような特権的な知識は、この全体論的な知識観においては存在しないのである。体系全体の再調整を行って命題の真理値を再配分する仕方は複数あり、ただ一つには決まらない。

- 「知識の全体論」の帰結

・理論の決定不完全性(underdetermination)

あらゆる観察データと合致する整合的理論は複数存在するという事態。

・哲学と科学との関係性の転換 境界線が不明瞭に。

➤ クワイン：「自然化された認識論 (epistemology naturalized)」

科学的認識を基礎づけるべき哲学的認識論が経験科学と地続きになる事態。

→知識として連続的であり、哲学と科学とが協働しうる可能性。「自然主義(naturalism)」

3. プラグマティズムの科学論 p.184-187

- 「自然主義(naturalism)」：現代のアメリカ哲学に極めて強い影響力を及ぼしている。

- プラグマティズム：世界を「神の視点」からではなく「行為者の視点」から捉えようとする立場である。C・S・パース（創始）→W・ジェイムズ（一般化）→J・デューイ（社会的な応用）

➤ パース

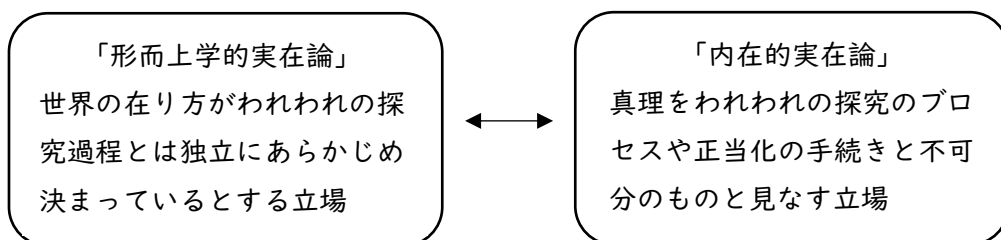
・「プラグマティズムの格率」：ある対象の概念を明確に捉えようとするれば、その対象が実践に関わりのあるどのような結果を引き起こすかを考察。

Ex: 物体の「重さ」も「硬さ」も実践的に働きかけてテストを試みることによって知られる。

→近代科学における実験的方法の導入は、「プラグマティズムの格率」に合致する。

・研究者の共同体の試行錯誤と自己修正のプロセスを重視し、研究者の共同体が探究の末に獲得される確信こそが「真理」と考えた。

➤ H・パトナム



真理はわれわれのもつ概念や探究の方法と相対的にしか決まらない。他方で、真理とは探究のプロセスの果てに得られる「理想化された正当化可能性」ないしは「合理的な受容可能性」と主張する。

➤ R・ローティ

プラグマティズムの特質

① 反本質主義：真理や知識や道徳には永遠不変の本質があるとするプラトン以来の西洋哲学の立場を否定し、哲学の営みを本質の探究ではなく歴史的状況における社会的実践と見なす考え。

② 事実と価値の連続性：事実と価値の間にはいかなる認識論的あるいは形而上学的区別も存在しない、とする連続主義の主張にほかならない。そこから、科学と道徳の間にも探究の方法に差異はなく、科学的認識の客観性とは「強制によらない合意」を目指すことだとされる。

③ 会話の継続：事実と価値の間にはいかなる認識論的あるいは形而上学的区別も存在しない、とする連続主義の主張にほかならない。そこから、科学と道徳の間にも探究の方法に差異はなく、科学的認識の客観性とは「強制によらない合意」を目指すことだとされる。

・われわれの知的活動を、新しい語彙によって世界を「再記述」する試みとして捉える。
→真理の最終的な収束地点といったものを想定する必要はない。議論において、「実り豊かな不一致」こそが望ましい。

◎ 現代のプラグマティズムの精神

統一性よりは多元性を重視し、科学をも人間のより良き未来に資する「予測と制御の目的に役立つ語彙を増殖させるもの」と見ようとする。